６年生　宮沢賢治作品　ブックトーク　　２０１５年１１月２０日

今日は宮沢賢治の作品から４つを選んで皆さんに紹介します。
４つとも動物が出てくる話です。

まずは**『どんぐりと山猫』**です。
物語は、一郎という男の子のもとに、おかしなはがきが一通届くところから始まります。
はがきにはこう書かれていました。（読む）（かねたいちろうさま……やまねこ拝）
宮沢賢治はオノマトペの達人といわれています。
「オノマトペ」ってみなさん知っていますか？
オノマトペとはもとはフランス語で、日本語では擬声語・擬態語といいます。「雨がざあざあ降る」の「ざあざあ」や、「星がキラキラ光っている」の「キラキラ」がオノマトペです。
このオノマトペがたくさん用いられていて、『どんぐりと山猫』は宮沢賢治らしい作品の一つといえます。オノマトペが用いられた文章には光や音が加えられ、物語が生き生きとしてきます。
例えば、、、（読む）（「墨もがさがさして指につくくらいでした」「山猫のにゃあとした顔」「まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのようにうるうるもりあがって、まっ青なそらのしたにならんでいました」「すきとおった風がざあっと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました」「滝がぴーぴー答えました」「たくさんの白いきのこが、どってことっでこどってこと、変な楽隊をやっていました」）
このオノマトペとともに、物語を楽しんでください。

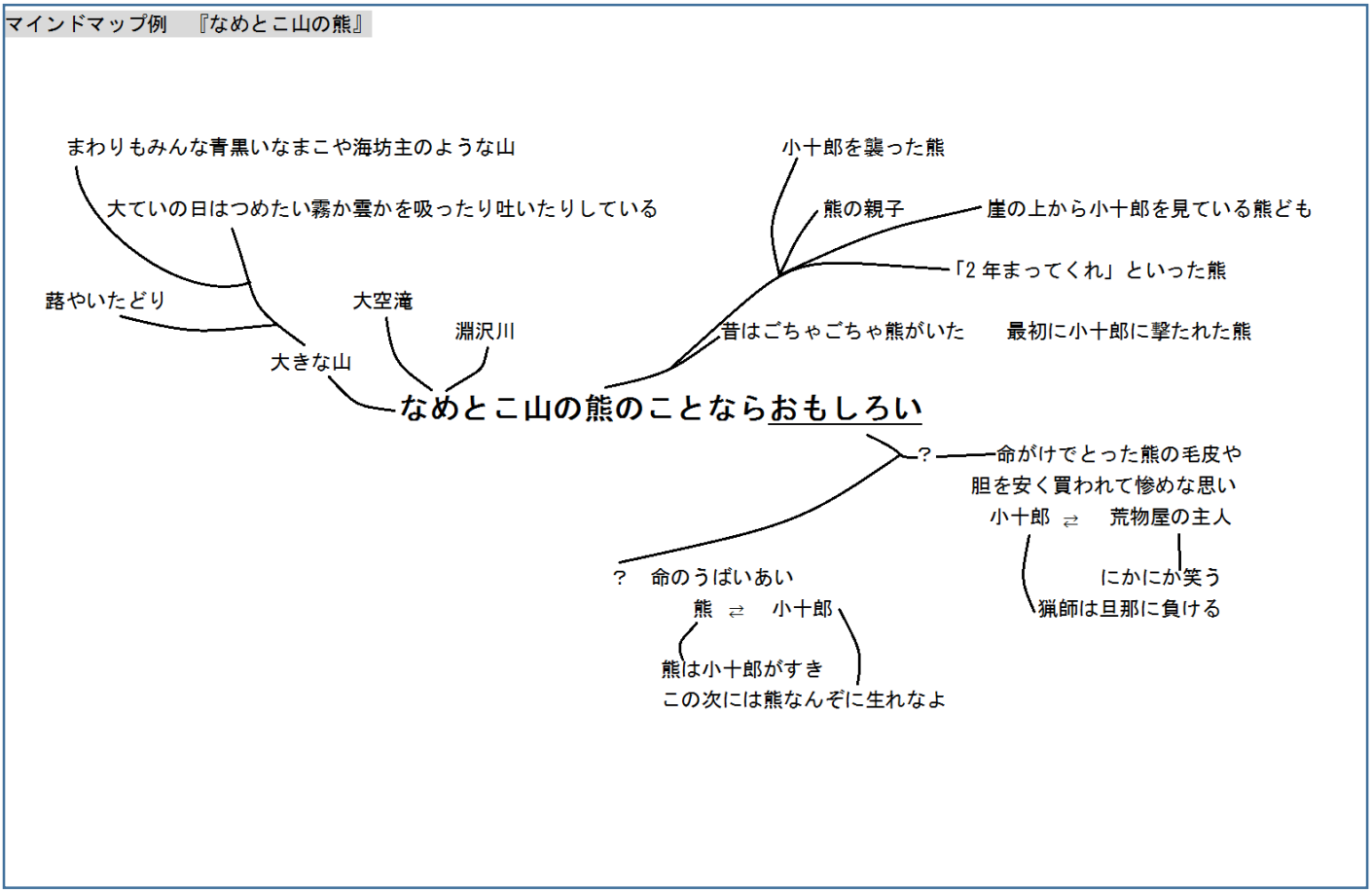
山猫の次は三毛猫の出てくる**『セロ弾きのゴーシュ』**
セロというのはチェロのこと。バイオリンを大きくしたようなもので、床に立てて演奏します。
オーケストラでセロを弾くゴーシュという男が主人公です。
今度、町の音楽会にオーケストラ仲間と出場するために、一生懸命練習していましたが、ゴーシュはあまり上手に弾けません。
岩手県にある宮沢賢治美術館には、賢治が愛用していたチェロが展示してあり、賢治はある作品を書くために必要なので、チェロを３日で上手になりたいといっていたこともあるそうです。そういったことがベースにこの話が作られたのではといわれています。
さて、ゴーシュは演奏会を１０日後に控え、セロを家に持ち帰って、夜に練習を始めるのですが、毎晩いろいろな動物が訪ねてきて、ゴーシュにいろいろな注文をします。
一番初めに訪ねてきたのは三毛猫で、ゴーシュの演奏した音楽を聴かないと眠れないので、シューマンの「トロイメライ」という曲を弾いて欲しいといいます。
「トロイメライ」はこんな曲です。（一節を流す）
確かに眠くなるような音楽ですね。ところが三毛猫の生意気な態度に腹を立たせたゴーシュは、「インドの虎狩り」という曲を弾きます。これは本当にはない曲なのですが、その部分を読みますので、ゴーシュが演奏した「インドの虎狩り」という曲が、いったいどんな音楽だったのか、皆さん、ちょっと想像しながら聞いてみてください。
それでは読みます。（読む）（「では弾くよ」……「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。）さあ、いったいどんな曲を弾いたのか、想像できましたか?
そのあとも、かっこう、タヌキ、野ネズミなどが練習の度にやってくるので、追い返そうとしているうちに夜が明けていくということを続け、とうとう演奏会当日を迎えます。
ゴーシュのセロの腕前はあがったのでしょうか？それは、読んでのお楽しみにしたいと思います。

セロ弾きのゴーシュに野ネズミが出てきましたが、次はネズミが主人公の**『ツェねずみ』**を紹介します。
ある古い家の、真っ暗な天井裏に住んでいる、「ツェ」という名前のねずみが主人公です。
この「ツェねずみ」とっても嫌な奴で、他の動物も付き合わなくなり、ついには柱や、壊れた塵取りだのバケツだの、ほうきだのと付き合うようになりますが、悪いことが起きるとなんでも相手のせいにして「まどうてください」、、、弁償してください、償ってくださいという意味なのですが、、、と１０回、２０回、いえいえもっと、どうかすると２５０回もいうものですから、柱や道具たちも嫌気がさして、口をきかなくなります。そんなわけで付き合うものがいなくなってしまったツェねずみは、最後はとんでもないやつと付き合うようになるのですが、、、。
ところで、皆さん、口癖はありますか?私は家族に聞いたら、何かにつけてすぐ「めんどうくさい」といっているといわれました。「めんどうくさい」、、、２５０回も言わなくても、何度も言っていたら嫌われそうですね。気を付けたいと思います。
この作品もオノマトペに注意しながら読むと面白いと思います。

最後はネズミとは対照的に体の大きい動物、クマが出てくるお話、**『なめとこ山の熊』**です。
なめとこ山という大きな山に住む熊たち、熊撃ちの達人である小十郎という男、小十郎から熊の毛皮や胆を買う荒物屋の主人が出てきます。
この物語は正直、とても難しい話だなと思いました。読んでいると疑問に思うことがたくさん出てくるのです。ですが、宮沢賢治が熱心な仏教徒で、宇宙や星に関心を持ち、「石っこ賢さん」などとニックネームがつくほど石の採集に興味を傾けていたこと、自然を愛したことなどをふまえると、たくさんのヒントとなるキーワードが込められていることがわかってきます。宮沢賢治の作品は、どれにも共通に言えることは、もちろん、賢治が言いたいことが作品に込められてはいるのですが、強くはっきりと描かれていることが少なく、なんだかわからない、「?」なことが多いのですが、そういったキーワードをもとに、読者の私たちがあれこれ想像してこれはこういうことではないかとそれぞれに解釈できるところが魅力であるといえると思います。
例えば、私が疑問に思ったことの中から一つを紹介すると、物語は「なめとこ山の熊のことならおもしろい」という文章で始まるので、てっきり面白おかしい話だと思って読み始めました。ですが、クマと熊撃ち、命の奪い合いの話ですし、命がけで獲った熊の毛皮や胆を、安い値段で買い取られてしまって、小十郎が惨めな思いをする場面などが出てくるので、「いったいどこが面白いのだろう。どちらかというと物悲しい話だな」と最初は思いました。
ですが、視点を変えて読んでみたり、先ほど話したいろいろなキーワードから私なりに解釈すると、「なるほど、なめとこ山の熊のことならおもしろい」と感じることができました。
あまり詳しく話してしまうと、皆さんがこの物語を読んだ時の楽しみが半減してしまいますので、このくらいにしておきますね。
ぜひ、皆さんもミステリー小説（探偵小説）を読むように、謎ときに挑戦してみてください。
既に作品の謎解きに挑戦した人たちによって、『宮沢賢治語彙事典』や『宮沢賢治オノマトペ辞典』なども作られているので、どうしてもわからないことはそれらを見てみるのも面白いと思いますが、この辞典も、それぞれの解釈によるもので「正解」ではないので、ぜひ自分でいろいろと考えてみて、また、まわりの友達と考え方を比べてみてください。
自分の考えを友達と比べるときに「マインドマップ」というものを作っておくとわかりやすいですし、自分の考えもまとめやすくなります。マインドマップとは、自分の頭の中で考えていることを目に見えるようにして、整理しやすくするための道具と考えてください。
例えば、先ほど私は「なめとこ山の熊のことならおもしろい」という文章を疑問に感じたと話しましたが、そう

いう時は、まず、その疑問を真ん中に書きます。（マインドマップ例を黒板に掲示する）そこから考えたことを線でつないでどんどん思いつくままに書いていくのです。線はどんどん増やしていってもいいですし、先につないで行ったり、枝分かれしたり、元に戻ったり、他の線とつないでももちろんかまいません。

マインドマップ例　『なめとこ山の熊』



今日は、宮沢賢治の作品『どんぐりと山猫』『セロ弾きのゴーシュ』『ツェねずみ』『なめとこ山の熊』を紹介しました。

以上